

高沐鴻の詩作について¹

—狂飊社時期以後の詩作を中心に—

内 藤 忠 和

前稿「高沐鴻の詩作について—狂飊運動期の作品を中心に—」²の概略

本研究は、中国の20年代文学を彩る文学結社狂飊社のメンバーであり、抗日戦争期から建国後、さらに文革終結後に至るまで創作を続けた文学者高沐鴻（1900—1980）を対象とするものである。創作歴60年にもわたる彼の作品を年代順に分析し、その作風の変化を追跡する作業を通じて、従来狂飊社主宰高長虹の研究に偏りがちであった狂飊社研究をより充実させ、同時に高沐鴻がその出現を準備した20世紀中葉～後半の中国文学を代表する作家集団“山薬蛋派”との連続性を探ることを目指している。

前稿「高沐鴻の詩作について—狂飊運動期の作品を中心に—」では、高沐鴻の習作期から狂飊社時期の経歴と詩作を概観・分析し、およそ以下のような結論を得た：五四運動の洗礼を経て「近代的自我」に目覚めた高沐鴻は、『新詩集』（1921）において自然の美と神秘、そして社会の矛盾に目を向け、高長虹らの導きで狂飊運動に参加する。20年代半ばの狂飊運動期、高はまず第一詩集『天河』（1927）において封建制度の重圧をはねのけて愛を貫く若者の姿を抒情豊かに描く。続く第二詩集『夜風』（1928）においては、「自我」・「恋愛と闘争」といった『新詩集』・『天河』以来の主題からより戦闘的な「反封建・思想革命」への転換が見いだせる。そして第三詩集『湖上曲』（1929）においては急激な左傾化、叙事性と物語性の獲得といった大きな作風の変化を獲得している。こうした抒情性豊かな作風から叙事性及び物語性の獲得といった変遷の軌跡は、後年彼がその登場を準備した山薬蛋派の作家群がたどった変遷の跡と相似形を描き出している。

本稿では、引き続き1930年代以降の高沐鴻の詩作と生涯に注目し、その作風の変遷を概観していきたい。

5. 30年代～解放前

5.1 1930年～抗日戦争勃発まで

1930年春、狂飆社主宰である高長虹が日本に向かい、主要メンバーが散り散りになった結果、1924年から始まった狂飆運動は終わりを告げる。高沐鴻は4月27日、『山西日報』の文芸副刊『前線上』の創刊に携わり³、同時に創刊号に「序『前線上』」⁴という文章を発表した。高はこの文章の中で、現代は死と再生が隣り合う最前線の時代であり、我らの武器は科学と芸術、そして労働と革命であると主張し：

全ての流派の勢力や、敵対的勢力に包囲された狂飆運動は、金銭という凶悪な鉄の型に拘束され、動くことも、成長することも、十全たることも、成功することもできなかった。⁵

と狂飆運動の失敗の原因を総括したうえで：

しかし狂飆運動は行動する芸術を主張し、大いに芸術を愛した。我らは自ら労働と労働運動に参加したのち、労働の芸術、無産階級の芸術を主張し、またそれを創造しようとした。⁶

と自らの主張が狂飆運動期の「行動する芸術」から「労働の芸術」・「無産階級の芸術」に転じたことを明らかにする。事実、8月10日発行の『山西日報』副刊『前線上』第三十期には、岡夫から転送された嘗ての朋友高長虹の進歩的詩「普羅列托利亞詩歌（之一）＊日本で創作」を掲載し、同時に詩の後に新中国のプロレタリア詩の現状を紹介した評論「普羅列托利亞的詩」を付け加えており、プロレタリア文学への関心と接近を窺い知る事ができる。

この『前線上』には第一期から第三十期に至るまで連続して、“沐鴻”・“M”の名義で数多くの散文、雑文を発表しているが、詩作は「五月紀念」（1930）一篇に止まっている。本作ではまず冒頭においてメーデー、五四運動、濟南事変、国辱記念日など中国の歴史を動かした五月の日付を列挙した後：

（＊一部抜粋）

这血的花的五月呀，叫喊着：
“觉醒！劳动！独立！自存！—
“世界的手！中华的手！—
“打倒吃人阶级—强盗之群呀！”
这口号，要我们—
洗涤这人类的羞耻！

この血と花の五月が、叫んでいる：
“觉醒！労働！独立！自立！—
“世界の手！中華の手！
“食人階級を打倒せよ—強盗の群れを！
このスローガンは、我らに—
この人類の恥を洗浄させる！

平填这人类的缺陷！
挽回这人类的错误！
铲除这人类的罪恶！

この人類の欠陥を穴埋めさせる！
この人類の過ちを挽回させる！
この人類の罪惡を取り除かせる！⁷

国民運動、労働者運動を発動して“食人階級”を打倒し、“人類の罪惡”を取り除け、と高らかに歌う。メーデーへの言及や階級闘争を思わせる語句もあり、明確な左傾化の傾向が見いだせるが、詩歌というよりはスローガンを連呼する非常に観念的な作となってもいる。

1930年秋、友人の紹介により、妻と長子長女を連れて帰化市（現在の呼和浩特市）に赴き、綏遠省第一民衆図書館の管理部主任に任命された。この時期、高は現地の『綏遠民国日報』⁸の文芸副刊を主宰しており、32年秋までの期間にのべ三十篇以上のエッセイ、評論、書信、詩歌を紙上に発表しているが（名義は“沐鴻”・“M”）、詩作は「致贈于曙放婚宴之前」（1932）・「偶然来到一個清晨」（1932）の二篇に限られている。ここでは「偶然来到一個清晨」を見てみよう；

（*末尾部分より）
偶然来到一个清晨，
雨呵，淋淋，
风呵，息息地不停。
我的生命又在甦醒。

活動一！平靜一！
预备着，前向的进行。
尺蠖之曲以求伸：
风雨之朝待晴明。

偶然やってきた朝、
雨がしとしと、
風が、さわさわと止まない。
私の生命はまたよみがえる。

活動！一平静！
準備せよ、前進を。
尺取虫が縮むのは伸びんとせんがため：
風雨の朝に晴れを待つ。⁹

帰化という新天地で再生を果たした高が、再び未来に向けて立ち上がり、前に進もうという意欲を見出すことができる。事実この時期の高は綏遠エスペラント語学会の理事を務めるなど、その活動範囲を広げており、また、狂飆社時期の朋友であった向培良が主催する雑誌 南京『青春月刊』¹⁰に連作詩『時代的戦士』の一部を寄稿してもいる。

現在、『時代的戦士』の全貌を知ることにはできないが、『青春月刊』及び『詩

文集』所載のものによってその一部を目にすることができる。『青春月刊』創刊号（1932年5月）に「今旦呀再旦」（第二集第一唱）、1巻第3期（1932年7月）に「旧世界已絵出」（第二集第五唱）、「走上了夢幻的途程」（第二集第六唱）、「你不似末运的追踪」（第二集第七唱）が掲載されている。ここでは「今旦呀再旦」及び「旧世界已絵出」を中心に取り上げてみよう；

●「今旦呀再旦」

今旦呀，再旦，地狱的悲曲已经唱完。

那颓靡的歌音呵，何其穷困，何其哀婉！

似秋虫之将死的悲唤，似白日之沉沦暮晚—

深暮的苍老的迷梦，让他们如何遗散？

@@@@@（中略）@@@@@

我今揭破了地狱的黑暗，让魍魎露形裸观：

人世间的魔鬼，这一个黑心的恶汉与奸徒。

今天呀，才知道你们的命运已经颓倒了！

呀，朋友们，苦难的英雄们，人间的战士呀。

我已经为你们作了先锋者，

请莫再把后殿的光荣丢掉！

把歌曲，那靡靡的，撒手抛掉！

要唱，唱我歌，我歌如电发而雷噪。

试听一声那北天角上的红光闪后呀，

今朝、再びの朝、地獄の悲曲はもう歌い終わった。

あの頹廢した音色よ、なんと貧しく、なんと悲しい！

秋の虫の死の悲嘆にも似て、白日の沈む暮れにも似て—

深い暮れの枯れた夢、彼らをいかに霧散させようか？¹¹

（中略）

私は今地獄の暗黒を暴き、魍魎魍魎にその姿を露わにさせる：

人の世の悪鬼、この腹黒い悪漢と賊どもを。

今日、ついにお前らの命運が尽きたと知れ！

ああ、友たちよ、苦難の英雄たちよ、人の世の戦士たちよ。

私は既にあなたたちの先鋒となった、

どうか二度と殿軍の栄光を棄て去らないでくれ！

歌を、あのみだらな歌を、手放し捨て去れ！

歌おう、我が歌を、我が歌は電光と雷鳴のごとし。

聞いてみろ、北の空の紅い光のきらめきの後に続く、

那个暴跳的砍杀的天鼓怒号！
听我歌，应霹雳，东山到—
听我唱出这一支翻地覆天的大叫：

激しく切り裂く天の鼓の怒号を！
我が歌を聞き、霹靂に应えて東山に至る—
この天地をひっくり返す叫びを聞け：¹²

「偶然来到一個清晨」同様、朝の描写から本作は始まる。「私」は「人の世の悪鬼」、「悪漢」、「賊ども」が跋扈する「地獄の悲曲」を歌うことを止め、天地をひっくり返す「我らの歌」を歌うよう「人の世の戦士」に呼びかける。

来了，来了，我们合唱吧，“新世界来到”！
那天上的红日，明白在高揭而高耀！
少年人，请吧，参加我们的先锋队大队，
我们还在欢迎你们的呀勇敢的脚步力来到！
向前进，同志们，那敌人的烽火已经渺小，
我们的火力呀，再要加远射而高描。
向前进，同志们，那边的风势已经颓到，
敌人的命运呀似磷点躲避！
紧握我们的枪杆吧，要屠尽，屠尽，
反动的，魔道的，侵占的阶级—

来た、来た、我らは歌おう、“新世界の到来を”！
あの天上の紅い太陽は、明らかに高らかに輝く！
若者よ、どうか、我らの先鋒隊に加わってくれ、
我らはあなたたちの勇敢な脚力の到来を歓迎する！
前に進もう、同志たち、敵の烽火はもうちっぽけだ、
我らの火力は、もっと遠くへもっと高く。
前に進もう、同志たち、向こうの勢いはもう衰えている、
敵の命運はもうマッチの火のように身を隠すのみ！
我らの銃把をしっかり握れ、屠れ、屠り尽くせ、
反動の、無道の、侵害の階級を—

そして更に「我ら」は「新世界の到来」を歌い、若者たちに戦列へ参加し、「反動の、無道の、侵害の階級」を「屠り尽くそう」と呼びかける。先の「偶然来到一個清晨」同様、新天地での希望にあふれ、またさらに戦闘的なメッセージに満ちた作となっている。旧社会の否定と反動勢力との闘いという主題自体は

20年代の狂飆社期から続くものであるが、「紅太陽」・「階級」といったタームが詩人の思想的変遷をうかがわせる。

旧世界已绘了图画一幅：

利喙的巨蛇呀，在将弱小残食。
我战栗于这人类的共同的厄运，
战争与漂流驱使我一身无所。
我回归故乡，我的友伴有几多？

● 「旧世界已繪出」

旧世界は既に一幅の絵を描いている：
鋭いあぎとの大蛇が弱きものを喰らう。
私はこの人類共通の災厄に戦慄し、
戦争と漂泊が私の身の置き所を失わせる。
私は故郷に帰るも、友は幾人いるだろう？¹³

旧社会という地獄絵図を前に居場所を失った「我」は故郷に戻り旧友に会う。だがそこでも孤独であった「我」は未来への希望を胸に旅立つ。そして過去の英雄の足跡を辿った「我」はある事を悟る：

凭这个，历史又给我们以真解，
一串的悲剧呀：个体雄飞，群体雌伏。
豪乱与纷争不过借于英雄以荣光，
帝业霸基下堆满着弱小者的枯骨。
不世的罪孽于今重积，
今日呀才是群魔伏罪的一日！
我愿高吹给人类以兴起之笛：
打倒老朽的旧世呀，建立起自由的新国！
没有英雄！没有帝王！没有圣者！
社会本造成自我们个体的群集！
@@@@@（中略）@@@@@
我们愿且迟缓了几日的婚恋，
以期那革命大业的积极建立。
愿红日系住了我们的爱恋，
如白云永远在晴空出入；
待等到革命的潮退浪息时，

このお蔭で、歴史は私たちに真の解を与えた、
一連の悲劇は、個人の勇躍と集団の雌伏にあると。

戦乱と紛争は英雄に栄光を貸し与えたにすぎず、
帝王覇者の業のもとには弱者の白骨が積み重なる。

罪業は今に至るまで積み重なり、

今日こそ魔物たちが罪に伏す日だ！

私は高らかに人類に立ち上がる笛を吹こう：
老朽化した旧世界を打倒し、自由の新たな国を打ち立てよう！

英雄も帝王も聖者もない！

社会はもとより我ら個々の群衆から造られているものだ！¹⁴

—（中略）—

我らは暫し幾日か恋と結婚を遅らせ、
革命の大事業の建設を期すことにした。
紅い太陽が我らの恋をつなぎ留めることを願う、
白雲が永遠に晴天に出没するかのよう。

我们再来畅饮呀那无尽的爱的香
滴。

革命の波が収まるのを待って、
再び心ゆくまで愛の香しい滴を飲みつくそう。

従来歴史を作ってきた個々の英雄や帝王は強盗に過ぎず、集団を構成する群衆こそが世界の主人公であり、この欺瞞に満ちた旧世界を打倒すべきだと「我」は気付く。そして現在は愛情よりもまず革命の成就を優先しようとする。その後「我」はある大思想家のことを思い出し、その孤独と怒りに思いを馳せ、そして彼とともに往くと連帯を表明する：

个思想的人，个革命理论家，
我全般理想与行动的导师呀，
你孤苦的心，你孤苦的高怀，
有谁伴有谁伴你远行荒漠？
我愿舍弃了爱恋与战斗的刹那，
以虔敬的忠诚，有力的爱护，
去贡献你友情的契合—
那友情的契合呀—革命的前途的
契合

一個の思想の人、一個の革命理論家、
私の理想と行動のすべての導師よ、
あなたの孤独な心と胸の内、
誰があなたと共に荒野を往くというのか？
私は恋愛と戦闘の刹那を棄て去り、
敬虔の忠誠心と力ある保護を以て、
君との友情の結合に貢献しよう—
友情の結合は—革命の前途の結合だ¹⁵

狂飆社時代の高沐鴻の詩作は、「恋愛至上主義」から「革命と恋愛」、そして「反封建・思想教育」へと主題が変化してきた。この連作詩「時代的戦士」においても革命を恋愛に優先させる姿勢は変わらないが、【旧社会の破壊からマルクス主義による新世界の建設】という目標点が新たに加わっている。また、かつてはニーチェの超人思想の影響か、大衆を見下す傾向があったのが、労働者を自身よりも先進的と見なす認識の変化も見いだすことができる¹⁶。一方で狂飆社時代の幻想的かつ豊かな叙情はまだまだ色濃く残されてもいる¹⁷。

旺盛な創作活動が再開されようとした矢先、10月に肺結核からくる吐血が再発し、高は已む無く『綏遠民国日報副刊』の編集業務を辞して妻子とともに帰化に別れを告げ、再び故郷の武郷に帰った。

この後数年にわたり高沐鴻の関心とエネルギーは文芸創作ではなく、現実の革命運動に向けられることになる。まず冬には病身のまま太原に赴き、同郷の先輩武靈初が開設した山西青年図書館に学び、『共産主義ABC』・『資本論入門』といった進歩的書籍に触れた。翌1933年には故郷の武郷に戻り、現地の進歩的青年と共に『武郷週報』を創刊して宣伝活動に努め、また“武郷流通図書館”

などの組織を立ち上げて教育啓蒙活動に従事した。34年から35年にかけては山西の軍閥閻錫山の追及を逃れて北京・太原を転々として地下活動に参加し、1936年北京においてようやく中国共産党への入党が認められる。

10月中旬、太原に戻った高沐鴻は、抗日統一戦線組織である犠牲救国同盟会の仕事に着任する。閻錫山政府の理論委員会委員という合法的身分を得て文芸界の進歩的人士を動員し、“全国文芸界抗敵後援会太原分会”を成立させ、山西文芸界の抗日救国工作进行を指導した。

さらに10月29日、新たに創刊された『太原日報』の文学副刊『開展』の編集主任を担当し、王玉堂（岡夫）、趙樹理、王中青ら後の“山菓蛋派”を形成する進歩的文学者を組織して文芸作品を発表させ、民衆の抗日への機運を高めることに尽力した。但し、『開展』紙上にはエッセイを発表するのみで、自身の創作物を掲載することはなく、この傾向は日本との戦争勃発後も暫く続く。

5.2 抗日戦争～解放まで

1937年夏、日本との戦争が勃発すると、高沐鴻は故郷の武郷県における犠牲同盟会の活動と『太原日報』副刊『開展』の編集業務を継続する。11月に省都太原が陥落すると、太原近郊の榆社県に赴いて抗日県長の任に就いて行政を主管し、同時に榆社県最初の地方武装組織である県抗日遊撃隊や現地における共産党の党組織の立ち上げに尽力している。

1938年10月、王玉堂、鄭篤、陳大東、周化南、王振華、王書良、郝汀らと根拠地初となる文芸刊行物『文化哨』（油印月刊、のち『文化動員』に改名）を創刊し、翌39年には山西省犠牲同盟会長治中心区の機関紙『黄河日報』の主編集を担当、また、晋東南文化教育界救国総会（のちの太北文聯）・中華全国文芸界抗敵協会晋東南分会といった文芸界、教育界の連合組織を立ち上げている。

さらに1941年5月に蔣弼、林火、陳黙君、張秀中、喬秋運、袁勃らとともに『華北文化』を創刊するなど、共産党支配地域における宣伝及び文芸組織の創設と運営、そして媒体発行に大きな役割を果たした。

1942年1月、一二九師団政治部と晋冀豫区党委員会が連合して開催した太行山文化人座談会に参加し、太行軍政委員会書記・一二九師団政治委員鄧小平の文芸界へ提起された4つの意見を耳にする。高は会議の席上で主観主義と形式主義の克服、文芸工作者が深く基層に入って生活を体験することなどを要求

した。

1943年、『華北文化』第7期に抗日戦争期～内戦期にかけて唯一の詩作となる短編詩「高貴堂」を発表する、以下にその内容を見ていこう；

高貴堂，
朗朗の名响，
在武乡。
成为民兵的徽章，
一挂在民兵心上，
一颗亮堂堂的徽章。

枪，
在他的手上，
永不白放。
抱着一颗信心，
如铁如钢。

在群众大会上，
高貴堂の演讲：

反“扫荡”来时，
第四颗子弹，
打不到敌人身上；
第五颗子弹，
定将穿过自己的胸膛……

演讲变成一个口号，
像火一样通过群众的心房。

这口号，不说谎，不夸张，
是一个英雄的榜样；

高貴堂、
朗朗と名が響き渡る、
武郷に在って。
民兵の星となって、
一民兵たちの心に掛かる、
キラキラ光る星として。

銃は、
彼の手に在っては、
永遠に無駄撃ちがない。
信じる心を抱く、
鋼鉄のように。

群众大会で、
高貴堂の講話があった：

反“掃討”が始まって、
第4の銃弾が、
敵の身体を撃ち抜かなければ；
第5の銃弾は、
きっと自分の胸を貫くだろう……

講話はスローガンとなり、
火のように群众の心臓に届いた。

このスローガンは、嘘でもなく誇張もなく、
一人の英雄の模範である；

这口号用生命写出，
盖上血的印章。

这样，

在十月反“扫荡”里，
高贵堂开了枪。

他的手托得正正的，

四颗子弹，

穿过了三个敌人的胸膛！

（据传，三个死了，
还有一个中了伤。

四个子弹，

没有一颗白放。）

このスローガンは命を以て書かれ、
上には血印が押されている。

こうして、

10月の反“掃討”のさなか、
高貴堂は引き金を引いた。

彼の手は正確で、

4発の銃弾は、

敵2人の胸元を貫いた！

（伝え聞くところによると、三人は死に、
一人は負傷した。

4発の弾丸は、

一発も無駄にならなかったという。）¹⁸

このように同郷の抗日英雄高貴堂の反掃討戦における活躍を、徹底的に叙情性を排除して歌っている。詩句も非常に短くリズムカル、また用語も平易なものが用いられており、従来の詩風からの変化の大きさに驚かされる。こうした、【叙情⇒叙事】・【詩句の短縮】といった変化自体は『湖上曲』（1929）の段階においても見いだせるが、ここまで叙情性を排除しておらず、また用語の分かりやすさは読者として農民や兵士を想定していることをうかがわせるものである。本作は後に詩人の阮章竟がこれに曲をつけ、その結果太行区で知らないものはないほどの名曲「歌唱殺敵英雄高貴堂」となった。

同年冬、数多くの文芸工作者たちとともに、毛沢東の『文芸講話』を研究し、翌44年には整風運動に参加した後太行文聯の主任を担当する。またこの時期『古話正誤』といった伝統習俗及び封建的文化の過ちを正す啓蒙的書籍の執筆・編集・発行に従事した。

1946年3月、太行文聯副主任李光、王玉堂、編集鄭篤、王礼易らと太行文聯の機関誌『文芸雑誌』を創刊し、高は主任編集を担当している。以後本誌に彼は短編小説、評論、エッセイを継続して発表しているが、詩作を発表することは無く、そのエネルギーは晋東南地区の文芸界の組織立ち上げと運営、文芸雑誌の編集と太行光明劇団の運営といった方面に費やされることになる。

1949年7月、太行区文芸代表団を率いて北平に赴き、中華全国文学芸術工作者連合会第一回代表大会に参加し、中華全国文聯委員に選ばれて建国を迎えることになる。

6. 解放後から反右派闘争

6.1 建国直後の歓喜と批判

1949年10月1日、中華人民共和国の誕生を告げるニュースを耳にした高沐鴻は、感動のままに筆を振るって「这块肉是我们的胎生」を書き、10月18日『山西日報』紙上に発表した¹⁹；

说不尽欢喜，
说不尽兴奋：
中华人民共和国今天诞生！
他的母亲是伟大的。
他就是劳动勇敢的一
四万万七千万中国人民！
她怀孕了这一块肉，
一直经过了四五千年，
是那样千番挣扎，万般呻吟，
于今才一旦庆生！
啊，这块肉刻着我们的血轮，
这块肉才真是人民的骨血，
绝不同于改朝换代，唐宋明清。
开天辟地就有人民，
古往今来却未见人民专政。
政权一贯包揽于剥削阶级，
人民在梦里也捞不到半分！
今天呀，人民才组织了自己的国家，
才执行着自己的政令，
才亲身坐了金銮宝殿，
才充分自觉的作了主人翁。

言いつくせぬ喜び、
言い尽くせぬ興奮：
中華人民共和国が今日生まれた！
彼の母親は偉大だ。
彼は労働する勇敢な一
4億7千万の中国人民だ！
彼女がこの一塊の肉を孕んでから、
4、5千年が過ぎ去った、
幾千回ももがき、幾万回も呻き、
ついに今生まれた！
ああ、この肉には我らの血が刻まれ、
この肉はまさに人民の血肉だ、
決して唐・宋・明・清のような王朝交代と
同じではない。
天地開闢より人民は存在したが、
古来人民による専政は未だ嘗て無かったこと。
政権はずっと搾取階級によって独占され、
人民は夢でもその半分も手に入れられな
かった！
今日、人民はついに自身の国家を組織し、
自身の政令を執行し、
自ら宮殿の玉座に座り、
十分に自覚的な主人公となった。²⁰

中華人民共和国が、数千年の時を経てようやく人民の胎内から生まれたと言^{ことば}祝ぎ、人民がついに自身の国家を手に入れ主人公の座に就いた！と喜びを爆発させている。

同年 12 月に開催された山西省第一回文代会の席上では、山西省文聯の初代主任に選ばれ、山西省文聯の機構を組織した。また、翌 50 年春には山西省協商委員会委員に選ばれ、のち省の公職に在るものを監察・審査する省人民政府監察委員会副主任に任じられるなど、政治方面の要職を歴任することになる。

この時期、職務の合間に農村の新たな姿を描いた組詩「農村所見」を執筆し、『山西文芸』第 1 卷 3 期に発表した。まず冒頭の「(一) 麦野」を見てみよう；

沿晋东南大道：

满坑、满谷、满坪川

麦子长得一人高！

我的眼睛发呆，

疑心那是一片大草原，

如此丰盛勃茂！

仿佛有个人告我：

“这片黄土怎么蛮起劲？

并不是单因加了粪。

根本啊，土地还家，

主人翁感觉作用，

长得那末顺心！”

晋东南の幹線道路に沿って：

一面の窪地に、谷間に、平地に

麦が人の高さまで成長している！

わが目は呆然とした、

あれは一面の大草原ではないかと、

かくも豊かに生い茂るとは！

あたかも誰かが私に告げているかのよう
だ：

“この黄土はなぜこうも力がある？

肥料を加えただけではない。

根本には、土地が家に戻り、

主人公の感覚が作用して、

あそこまで順調に育ったのだ！”²¹

このように、本来の持ち主のもとに戻った農地がその力を発揮し、豊かな麦を生い茂らせていることへの新鮮な驚きを表明している。続く「(二)「執行政府号召」」では、科学と計画の力を借りて、土地を生まれ変わらせようという政府のスローガンを歌い、「(三)「她们再不羞手羞脚」」では、嘗て手足を晒すことを恥じらっていた女性たちが日夜生産に積極的に参加し、男性の良きパートナー（“配角”）となっている姿を描いている。そして「(四)「和電斗争」」では、

電の被害を受けた村人たちが、日本軍の略奪に耐えたように、諦めず電との戦いにも打ち勝とうとする決意を歌っており、最後の「(五)「互済」」では：

有些偏僻小村，
老百姓生活还不平衡。
在夏收未来时，
三家五户，还不免走到邻舍，
门上借点米粮食用。

借贷是什么关系？

不是母钱生子利。
王妈妈借出一斗玉茭，
李伯伯借出一斗豆子，
夏借秋还籽对籽。
穷人有一种道义：
不把米谷放在囤里，
跟着旁人饿肚子。
拿把米救救邻舍，
出手那末顺利！

“米谷烂在囤，
放着东西饿死人……”
那已是死去的地主世纪。
人民创造了一个新世纪。

辺鄙な村では、
人々の生活はまだ不安定。
夏の収穫がまだやってくる前、
家々では、隣に駆け込んで、
食料を借りざるをえない。

貸し借りはどんな関係か？

元本が利子を生むものではない。
王おばさんがトウモロコシ一斗借り、
李おじさんが豆一斗借り、
夏に借りれば同じもので秋返す。
貧乏人には道義がある：
穀物を蔵の中に放っておいて、
近くの人を飢えさせたりしない。
米を持ち出して隣家を助ける、
手渡すのもすんなりと！

“穀物を蔵で腐らせ、
物を放置して人を飢え死にさせる……”
それは死に絶えた地主の時代のこと。
人民は新たな世紀を創造した。²²

嘗て借金の元となっていた食料の貸し借りは、今や相互扶助の精神の表れとなった、と新しい世界の素晴らしさを訴えている。

このように、本作は共和国建国後の農村における農地の改善や農民の意識改革、女性の地位向上、相互扶助の精神といった新たな発見を賞賛する内容となっており、叙事性の優位、平易な使用言語といった「高貴堂」(1943)以来の詩風を維持している。

しかし、翌月発行の『山西文芸』1巻4期²³には「「農村所見」読後」(路工)

という評論が掲載されており；

「我的眼睛发呆，疑心那是一片大草原，如此丰盛勃茂！」とあるが、あなたの眼ははっきり見ている、これは土地を取り戻した後の農民の成果だ、どうして「呆然とする」ことなどあろうか！どうして「麦が人の高さまで成長」したのではなく「大草原」などと「疑う」ことができよう？生まれ変わった農民たちは言っている、「毛主席が我らを導いて生まれ変わらせてくれた！我らが生産すれば家を発展させ国家を富ませる！」と。だから明確なのは：「わが目は呆然とした」り、「疑う・・・」のは個人の感情の発露であり、労働人民の中に立って賞賛していないのだ。それは生まれ変わった農民たちの土地や作物に対する愛を表現してはいない。²⁴

と、詩人の立ち位置が労働人民のそれではなく、個人の感情を発露させたに過ぎないと痛烈に批判している、さらに農民の思想感情との距離や使用言語の難解さについて指摘したのち、最後の部分で：

最後に説明しなくてはならないのは、「農村所見」は上記欠点があるとはいえ、総体的に見て、比較的良好な詩と言うべきだ。なぜならそれは新たな感情を以て新たな時代を歌ったものであり、旧時代の「個人」の感情の発露があり、群衆の言語ではないものが中に入り込んでいるとはいえ、既に「延安服」を身に着け人民のために奉仕するという道を進んでおり、月桂冠を戴き「皇帝」に鑑賞してもらおうものではないからだ。²⁵

このように欠点はあるものの、新たな時代を賛美し、人民に奉仕している点において評価できる、と評論を終えている。「個人の感情」の発露や大衆との乖離といった傾向は確かに狂飆社時期の詩作において顕著なものであったが、この段階の詩作においてはかなり控え目になっていると言って良い。人民共和国建国当初、共産党中央は知識人や文芸界の人士に対して比較的寛容な態度を取っており、一連の知識人・文芸界批判の嚆矢となる“『武訓伝』批判”の開始が1951年であることを考えると²⁶、この時点での高に対する批判はかなり早いものと言って良いだろう。

以後高沐鴻のエネルギーは再び詩作以外の方面に向けられることとなる；1951年は一年を通して監察人員をつれて全省各地を巡回し、現状の把握と事件の調査といった監察委員会の職務に専念した。翌1952年夏、山西省人民政府文化教育委員会委員に異動となり、仕事の合間に文芸創作に従事したが、詩作については1954年の「寄茶歌」まで待たなくてはならない。

6.2 50年代中葉から反右派闘争へ

本節では、50年代半ばに執筆された「寄茶歌」(1954)、「太行吟」(1956)、「十二月之歌」(1956)を中心に論じていきたい。この三作は、高沐鴻が八年にわたる抗日戦争の概要を描こうとした²⁷、と回想しているように一つの意図のもと創作されたものであり、「寄茶歌」と「太行吟」は単行本『太行吟』として山西人民出版社から、『十二月之歌』は火花文芸出版社から(ともに1956年12月)発行され、後年『回春堂詩鈔』(1980年 山西人民出版社)が出版された際には、「太行戦歌」として、「太行吟」,「十二月之歌」,「寄茶歌」の順に収録されている。

ここでは本稿の趣旨に沿って、執筆年代順にその内容を見ていこう；

● 「寄茶歌」

本作は1954年1月23日に執筆された11章構造の組詩であり、差出人不明の茶葉を受け取るところから作品は始まる：

「一」

远远寄来一包茶，
片言不提，只字不挂。
寄茶的人儿是哪一个？
收茶的人儿难考查！

远远寄来一包茶，
姓名不署，邮址也不落。
送茶的人儿在何处？
收茶的人儿费了思索！

(一)

はるばる送られてきた茶葉ひと包み、
一言もなく、一文字もなし。
茶葉を送ったのは誰だろう？
茶葉を受け取ったものは頭をひねる。

はるばる送られてきた茶葉ひと包み、
名前は書かれず、住所もない。
茶葉を送った人はどこにいる？
茶葉を受け取ったものは思案に暮れる！

受け取った茶を飲みながら、これは南方に渡ったかつての戦友の誰かが送ってくれたものであろうかと想像する；

闻道南方产茶多；
南下的朋友屈指难数！
莫不是：这个老伙那个战友，
送这包茶叶来慰问我？

想来想去无着落，

聞くに南方は茶葉を多く産出するというが；
南下した友は指折り数えても数え切れない！
まさか、旧い仲間や戦友たちが、
この茶葉を送って私を見舞おうというのか？

あれこれ考えても結論は出ない、

南下の同志上千把！
那一个又是送茶人，
好像是他，又不是他。

毎日喝茶费思量：
想想这送茶人在何方？
想想这送茶人是哪一个？
是那个老伙捣这个谎？
—是那个渔翁撒这面网？

南下した同志は幾千にも上る！
誰が茶葉の送り主なのか、
彼のようにもあり、また彼でもなく。

毎日茶を飲み思案する：
この茶の送り主はどこにいる？
この茶の送り主は一体誰だ？
どの仲間がこの悪戯を仕掛けた？
—どの漁師がこの網を放ったのか？

第二章において、「我」は茶を味わいつつ、その香しい香り味わいから硬骨の老劉，勇敢な彭兄弟，俊才の小馬，正直者の小秦，早熟の小杜，南洋の宝石のような黒小妹といった嘗ての戦友を次々と思い出し、彼らのうちの誰かが茶葉の送り主ではないかと考える：

我把茶来再呷一口，
想起送茶人也是小杜，
小杜也有点香媚气，
仿佛在这茶杯里溢流！
十三岁念上马克思，
举动如同校正字句：
走步路儿，踏个脚印，
都要贴合上书本子。

我把茶来再呷一杯，
想起送茶人象黒小妹。
她黒艳而又黒艳，
她象个南洋小玛琍！

私は茶をさらに一口あおり、
茶葉の送り主が小杜ではないかと考えた、
小杜にも些か香気があった、
この杯の中にあふれんばかりの！
13歳でマルクスを読み、
言動は字句の校正をするかのよう：
道を行き、足跡を踏む、
自身を書物と符合させるように。

私は茶をもう一杯あおり、
茶葉の送り主が黒小妹ではないかと考えた。
彼女は色黒く艶やかで、
南洋の宝石のようだ！²⁸

続く第三章では、山野を縦横に往来して日本と戦い続けた老劉の活躍を描き、以下第四章では土地改革を指揮する小彭の雄姿，第五章では小杜の成長，第六章では大彭から言伝られた延安での激戦，第七章は敵機の襲撃にも怯まない小秦の覚悟，第八章は負傷しながらも戦い続ける小馬，第九章は女性の地位向上を推進する黒小妹の奮闘といった戦友たちの抗日戦争期の事績を回想して

いる。

そして第十章では抗日戦争に勝利し、そして今まさに国共内戦に決着をつけようと南下する姿が描かれ、最後の第十一章では再び現在に時間軸を戻して、各方面で活躍する旧友たちの消息が歌われる：

自从老伙们下了江南，
岁月奔驰如电闪。
人同祖国一道来成长，
霎眼孩童到盛年。

谁都有一条精神似活水，
来自抗日，解放战争年。
战争火焰里炼成人，
个个守住一条战线：

闻道老刘镇荆南，
剿匪镇反两难缓。
不知他瘦体已肥否？
还依旧朝朝暮暮少睡眠？

闻道小彭把中南“土改”参。
端端正正总结了番新经验。
可知人有成熟禾有香，
已非傻勇似当年。

古い仲間が江南に下ってから、
歳月は稲妻のように駆けぬけた。
人と祖国は一緒に成長し、
瞬く間に子供は壮年となる。

誰にも精神はありそれは流れゆく水のごとく、
抗日から、解放に至る戦争の年月。
戦争の炎の中で人は錬成され、
おのおの一つの戦線を守るのだ；

聞くならく老劉は荆南を鎮め、
匪賊討伐反乱鎮圧いずれも抑えた。
彼の瘦せた体はもう肥えただろうか？
まだ以前の通り毎日睡眠不足だろうか？

聞くならく小彭は中南地区を土地改革に参加させ、
新しい経験をきっちりまとめあげた。
知るべし人に成熟あり作物に薫りあり、
既に往年の蛮勇にあらずと。²⁹

そして詩人は：江南处处多茶树，（江南至るところ茶樹多く）／茶荫缭绕小茅庐。（樹陰は庵を巡る）／那个战友不在公余，（だれか战友が公務の合間に）／走出茅庐散步？（庵を出て散歩にでも行ったのではないか？）³⁰
と茶葉の来歴に改めて思いを馳せ、

茶包慢慢填挚情，
难忘旧游在战争。

茶の包みには真情が詰められ、
忘れがたい旧友が戦争にはいた。

篝火焚尽有余热，
千古难移战倡心！

寄个一言半语道不尽；
即使长篇大论也无能；
那如这包默默哑巴茶，
反到见得情长而意浓！

篝火燃え尽きるも余熱あり、
千古より移ろい難きは戦友の心！

一言では言い尽くせず；
たとえ長編の大論でもかなわない；
ならばこの包みの黙して語らぬ茶のように、
却って情意は良く伝わろうというもの！³¹

言葉で言い尽くせない旧情をこの黙して語らぬ茶葉に託したのではないかと推測し、送り主が誰であれ茶を楽しみ笑みを浮かべることが彼らの気持ちに伝えることになるだろう、と結んでいる。

突然送られてきた送り主不明の茶葉の包みから南方に渡った嘗ての戦友を思い出し、彼らの抗日戦争中の事績と現状をひとりひとり列伝的に歌いあげている。叙事的かつ平易な用語を用いる作風は維持されており、なお且つ歴史的そして空間的な広がりを持つ作品となっている。

●「太行吟」

上述の通り、本作は「寄茶歌」と併せて1956年12月に単行本の形で山西人民出版社から発行されている。三十二の短編から構成され、『詩文集』の80頁を占める長編連作詩であり、山西省太行山における抗日戦争の開始から国共内戦の終結までの各場面を歌う大作である。以下順を追ってその概略を見て行こう。

まず冒頭の「序詩」では本作の意図を以下のように歌う；

抗日のこまごました断片は、／まだ炎を上げている；／散逸した詩歌を／私に朗読させてほしい。／章節はすでにばらばら、／字句も完全ではない、／偉大なる歴史に対して／管から天を窺うがごときだが！³²

続く「鬼子進了娘子関」では；

日本の鬼が娘子関に進攻して、／砂塵が高く天まで舞い上がる！／蒋介石軍に閻錫山の官吏は尻尾を巻いて逃げ出し、／山河を全て放り出した！³³

日本軍の侵攻当初、蒋介石・閻錫山が真っ先に逃げ出す一方、八路軍は締め付けを逃れて自由を獲得し、太行山に留まって日本軍に抵抗する姿を描いている。

「接防」では、太行山で戦いにおいて、人民がそれぞれ自らを将軍に任じ防

衛に務める様子が歌われ、「腌臢の歌賛」においては、前線を放棄したのは敵を誘い込む計略である、という蒋介石・閻錫山の言い逃れを喝破してもいる。

続く「緬紳先生們」では自身の保身しか考えない居残った郷紳たちの醜悪な様を描く一方、「千古人民一片心」において、人民が八路軍を自身の家族のように歓迎して、彼らに協力するため民衆の軍隊を組織し、日本との闘いに身を投じる姿を歌い上げる：

「九路圍攻」, 「転移」, 「戦場」, 「祭掃」, 「余波」の5篇では、日本軍の九方面からの大攻勢（九路圍攻）を受けた八路軍が、太行山の地の利を生かして敵を山中深く誘い込み、武郷郊外の里庄灘で大打撃を与え、敵を退却させるまでの戦果が描かれている：

漳河に三尺の氷が張り、／黄土の大通りは凍って鉄床のよう。／遠くには叫びを近くには靴音を聞き、／日本の鬼が九路から攻めてきた！³⁴

（「九路圍攻」より）

笑うべし日本の鬼はおかしくなつて／遠く山地を攻めて自ら死を求める。／我ら目を開いても道がわからぬというに、／お前は目も見えずに死の壁にぶつかろうというのか？³⁵

（「転移」より）

とりわけ、クライマックスとなる「戦場」は比較的長く、熱のこもったタッチで激戦の有様を描きあげている：

わが軍が続いて山のあちこちからやってきた、／天は神の軍団を降臨させとくに配置させている；／地に伏した民兵たちは顔を上げ、／わっと一面の海を形作る！／一面の人海が天より降臨し、／民兵たちはもとより刀と槍！／岩の合間から手を伸ばす！／山中に鉄の網を仕掛けた！／わが軍は続いて山腹より下り、近くは射撃ししっかり狙いをつける。／山腹から飛びかかり刃を交わす、／日本の鬼どもに逃げ場などない！³⁶

（「戦場」より）

そして、列強に虐げられ委縮していた我が民族は、毛沢東と共産党のおかげで生まれ変わったと高らかに宣言する。

この大戦を半日戦い、／日本の鬼を幾千人殺したろう？／その数を我らは取り上げず、／日本の鬼どもに数えさせてやろう。³⁷

（「祭掃」より）

敗退した日本軍は途上火を放ち憂さ晴らしをするが、我が軍の大勝利という大勢は動かない：

戦役が終わり我らは軍を返し、／大通りには笑いが満ちる。／これにて国土は本来の姿を回復する、／自由、清潔そして安寧を。³⁸

（「余波」より）

激戦の後、しばし戦線は膠着状態に陥る。続く「一幅形勢図」では、抗日戦争前半の形勢を：

これぞ抗日戦争の第一段階、／国民党軍はわれらに面倒ごとを押し付け、／
我らは日本の鬼につきあって、／内に外に追いかけて、／蒋介石軍はただ
傍観するのみ！³⁹ （「一幅形勢図」より）

と簡潔かつ十分に説明する。そして「我們高踞在山巔」においては、味方は山間部、敵は平野部にそれぞれ拠点を構え、九路围攻戦の失敗とゲリラ戦の恐怖から全く敵が出てこようとしない膠着状態を説明し、「給食」において、我が軍が自給自足と敵が困り込んだ食料を奪ってしのぐ一方、敵占領区の民衆には碌に食べるものもない、という悲惨な状況を描いている。

続く「運輸隊」・「打“死雕”」では「寄茶歌」（1954）にも登場した戦友たちの活躍が描かれる；小彭は知略を駆使して敵の食料運送隊を奪い取って敵に徴発されていた人々をねぎらい（「運輸隊」）、馬將軍（小馬）は、トーチカに立て籠もる日本軍を見事おびき寄せて叩く（「打“死雕”」）。

そして「大出撃」及び「過渡」では、膠着状態から大攻勢に出た我が軍が日本軍を押し返す様相が描かれる：

持久戦のはて互いに密接になり、／敵とこちらの形勢は“犬の牙のように噛み合う”。／我が軍は隙に乗じて大攻勢に出て、／日本の鬼は將兵を失って喚きちらす。⁴⁰ （「大攻勢」より）

日本軍は南方に逃れ、無人の野を征くが如く蒋介石軍を駆逐する、蒋介石軍は日本軍に頭を下げて協定を結び、日本軍は再び北上して八路軍と対決する（「鬼子向南流」）；

南の戦場は楽そのもの、／ひとたび長駆するや数千里；／一突きするや大穴が空き、／蒋介石はお目見えの手土産を贈呈する！⁴¹ （「鬼子向南流」より）
太行山に戻ってきた日本軍は「焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くす」三光作戦を実施し、暴虐の限りを尽くす。我が軍の郭將軍は伏兵を以て日本軍を迎え撃つも流れ弾の犠牲になってしまう（「鬼子回頭」）。

こうした激戦を歌う詩が続く中、戦闘を通じて鍛えられ、成長していく少年兵の姿を描いた「生長」、はっきり敵味方の線を引き、減租減息を実施する小彭を主人公とする「界限」、飛蝗による食糧難と旱魃に対抗する人民の奮闘を歌った「蝗旱」といった解放区の群像を描いた詩篇も挿入される；

これらの詩篇と対照的に、「敵偽合了流」、「弾冠相庆的人们」では、日本軍

と蒋介石軍が合流して八路軍に対抗する情勢や、奴らにすりより官職を手にする郷紳たちの浅ましさが描かれる；

敵と傀儡軍が合流し、／黄河の水が下流に溢れる。／かつて官職に在った先生は冠を弾いて笑う：／“我慢の甲斐あってこの日が来るとは！”⁴²

（「弾冠相庆的人们」より）

再び詩人の眼差しは解放区に向けられ、「知疼知痒」では互助組、変工隊による農作業の効率化や、農民協会での民主的な政権運営など共産党政権の施策によって生まれ変わった農村の姿が描かれる；

名付けて“人を組織して機械と同等に役立つ”、／互助組、変工隊は満天の星のごとし。／古来人はそれぞれ門前の雪を掃くだけ、／赤の他人が家族になったことがあったろうか？⁴³

（「知疼知痒」より）

また、「脱胎換骨」では、整風運動を通じて現場を知る人民こそ世界の主人公である、と意識を改める党員たちの姿が描かれている；

人民にもっと近づくために、／党中央は整風運動を発動した。／皆は徹底的に立場と思想を入れ替えて自分に問う：／“全身全霊で人民のために尽くすと願うか？”／人民の目の前で皆は猛然と目覚める：／もともと人民が君主、自身は臣下だ；／人民が父母で、自身は子供—／忠孝の二文字はここでやっとなされる！⁴⁴

（「脱骨奪胎」より）

そして成長して王大姐と呼ばれるようになった黒小妹は、女性たちを組織し活動を進める毎日の中、日本軍がまもなく投降するという喜ばしい知らせを皆にもたらず（「王大姐」）。

ついに日本軍が投降し、今度は蒋介石軍との戦いが始まる（「日本鬼子投降」）が、日本軍の残存部隊との戦いもまた続いていく（「戦馬抄漳源」）、（「攻塔」）。

日本の鬼が投降し、／天下を三分した一角が終わりを告げた。／三つの矢印は改めてぐるぐる回り、／三つの勢力が盛衰する。⁴⁵

（「日本鬼子投降」より）

そして我が軍は、米軍と蒋介石・閻錫山の連合軍を打ち破りとうとう国家の自立を手に入れる（「斬掉猪鼻子」）；

黄河の水が溢れ堤防が傾き、／アメリカの飛行機が天空を旋回する。／蒋介石と米軍は大きく口を開けて解放区を飲み込もうとするが、／何ぞ囃らん伸ばした豚の鼻が痛みを覚えるとは！⁴⁶

（「斬掉猪鼻子」より）

このように本作は、32篇がゆるやかに繋がって一篇の長編叙事詩を構成し、太行山における抗日戦争から国共内戦にかけての苦闘と勝利、解放区の群像を描き切っている。叙事的な傾向に変化はないが、詩句に古典的な文言が多用されており、やや難解になっている。

●「十二月之歌」

本作は「太行吟」と同時期、1956年12月に単行本が火花出版社から発行されている。『詩文集』の紙幅を55頁占める大作であり、山西における抗日戦争の始まりから根拠地の建設と豪農富農の妨害、そして1939年の“十二月事変”⁴⁷の勃発に至るまでを描いた長編叙事詩である。

冒頭は抗日戦争の序盤、日本軍が山西に侵入し、子洪口の戦いで国民党軍があえなく敗走し、国土が蹂躪される場面から始まる；

日本の鬼の鉄蹄は残虐を極め、／太谷川をあまねく蹂躪する。／鳳凰山の前で一休みし、／得意満面で東南に入る。／子洪口をこじ開け、／国民党169師団を追い払う。／太鼓腹の將軍は“長敗”と呼ばれ、／引っ張ってきた人足は逃げだす！⁴⁸

残された晋東南の地では、人民が土地のボスを打倒して抗日政権を樹立し、男たちは軍にはせ参じ、女たちは農業生産に励む。国土を守るため、各地から部隊が集まり、根拠地の運営に共産党員は手腕を発揮する。

集まった兵士たちに党は“心の練兵”を施して覚醒を促す；蒋介石・閻錫山たちがやっているのは抗日ではなく媚日であり、やつらは不当に権力を握っていただけで、天下はもともと人民のものである、と。

授業が終わって心眼が開き、／新軍戦士は事の由来を知る。／抗日の舞台の上には人々が入り乱れるが、／唯一人民こそが正統派だと！⁴⁹

同時に共産党は群衆の親密な関係性を構築し、人々は本来持っていた反抗心をよみがえらせる。晋東南の気風は一新し、閻錫山・蒋介石はおろか日本軍にも対峙しうようになる。

蒋介石軍は日に日に遠く、／日本の鬼は日に日に近く。／晋東南の千里の地は、／旦夕のうちにその気風は目覚ましく一新した。／人心が一新してからというもの、／誰がかつての天下など覚えているものか！／蒋介石・閻錫山では驚かないのは言うに及ばず、／日本の鬼が自ら来ても対峙することさえできよう！⁵⁰

解放区を支えるため、群衆は喜んで食料や兵士を差し出すが、豪農富農たちは

言い訳ばかりで供出を拒み人手も出さず、中には供出を拒んで食料を焼くものまで出る始末。

解放区各地で群衆闘争が沸き起ると、脅迫する土豪にも民衆は怯まず戦う。閻錫山の下に逃れた連中は、根も葉もないデマを流すが、解放区の人々はまったく意に介さない；

さらに言う：“遙か望む太行山、／アカどもの都は贛南にも比すべし：／共産主義は嫁も共有、／人殺しも遊び半分。”／貴様のデマが酷くとも恐れはしない、／焦がれ望むも河東に渡るすべがない！／人民は天国で自由自在、／貴様は舌を噛み噛み無駄に心配しておれ！⁵¹

デマをものともせず解放区は発展を続けるが、新たに仲間に加わった者の中には敵を必要以上に軽視したり、英雄主義に陥る者が現れ、詩人はそうした味方の中の危険な兆候を諫める；

あなたは独りで一方面に当たることもできよう、／当然任務の成功も保証できるだろう；／だが言ってはならぬ、あなたが好きなのは：自由で愉快！／忘れてしまっているのは：大きな責任という荷物が肩に掛かっているということ！／同志よ！我らは自問すべし：／人民と比べて、自分は何ほどのものかと！／どうして自画自賛が止まらないでいられよう！／どうして自慢のぼせ上がることができよう！⁵²

前線から危急を告げる電報が届き、扇動活動が盛んになっていること、と新軍の中に旧軍の兵士が混ざりこみ、陰謀のリスクを抱えていることを警告するが、同志たちは気にもかけず、既に天下を取ったかのように勘違いする；

前線より緊急電報あり、／我らに忠告を持ってきた；／“太北ではあちこちで扇動が起こっている／どうして岳南で煙が上がらないことがあろう？／新軍の中に旧軍の軍人が紛れ込み、／新旧大いに交流しようと言う！？／交流しようがしまいが、／背後の陰謀を防ぐべし！”／陰謀があろうがあるまいが、／同志たちは無邪気に笑う。／思うに：“誰が虎のひげをしごこうとするものか、／旧軍の軍人風情が！”⁵³

日本軍が晋東南に侵入し、我が軍は防衛線を敷いて持久戦となる。傀儡軍は日本軍の侵入に勢いづき、連携して包囲戦を仕掛けるが、同志の中にはまだ危機感を持たないものがある始末；

日本の鬼と傀儡軍は包囲網を敷き、／我が軍は網の中。／同志の中にはそれを目にしようとせず、／なおも熟睡してうろつきまわる者がいる始末。⁵⁴

12月、日本軍と傀儡軍に包囲されて苦しい生活を送る中、ある朝いきなり拠点
が襲撃を受ける：

十二月は、月光寒々と輝く！／山から月を望むに手も届かんばかり。／月は
冷たく円か、月は冷たく西の空へ。／日本の鬼と傀儡軍は一重二重と我らを
包囲した！⁵⁵

山の抗日活動も苦しいもの、／草の根木の皮をともしする。／奴ら山のふも
とでは飲めや食えや、／豚羊を食い終えたら人肉まで！⁵⁶

夜来りて未だ風雨の声を聴かず、／不意に朝靄白雲のごとく現れる。／霧晴
れるも太陽の出ずるを見ず、／ただ霧の中叫びの上がるを聞く。／遠くはご
うごう近くはどかんどかん、／あたかも朝から練兵のよう。／あつという間
に霧が晴れて山が姿を現し、／びっしり銃と刃が門を塞ぐ！⁵⁷

逃げ出した我々に銃剣を突きつけたあばた面の兵士に見覚えがあり、敵はなん
と昨日までは仲間だったはずの警備連隊だった；

銃剣の主はあばた面—もともと我らは昨夜よき仲間であった！／昨夜は豚
羊をさばいて奴を慰労したのに、／今朝は何故態度を変える？⁵⁸

ハハッ、やはりそういうことか、／オオカミが飼い犬の衣を羽織っていた
か！／蔵を守る者が自ら盗む例は古よりあり、／警備連隊が今や反逆したの
だ！⁵⁹

傀儡軍によって我が軍は壊滅的な被害を受け、犠牲になったもの、捕虜となっ
たもの、裏切ったもの、それぞれの運命をたどる；

馬は飛ぶように道を北上し、／路上の知らせは血にまみれる：／言うには男
女はみな殺害され、／殺されなかった者も生涯虜囚となったと！⁶⁰

或る者は凶報を広め、／方某は裏切って官位を手に入れた！／洛陽の傀儡政
権の秘書となり、／手に入れた杜小娜を伴侶とした。⁶¹

事変の後、詩人はその原因を敵の裏切りと味方の楽観主義であると考え、それ
でも抗日の火は消えぬ、と作品を締めくくる；

事変の始まりを想い、／事変の終わりに思いをはせる：／トーチカを攻め落
とすはどこからか？／戦場で裏切るのは一体誰だ？／山北からの警報は日夜
やってくるのに、／山南の同志たちはそれを聞くことを知らない；／開いて
読むもまた茫然として文字無きがごとく、／首を振ってなおも言う、“間に
合うさ！”⁶²

大きな足で太行山を守り、／長矛は日本の鬼と傀儡軍を退ける。／抗日の糸

は絶えることなく、／山の左右の西風は寒し！⁶³

このように、1939年の“12月事変”に焦点を当て、抗日戦争序盤から抗日解放区の建設を経て閩錫山軍の裏切りに至るまでを描いている。一つのストーリーを歌う叙事詩、という点においては従来の作風を引き継いでいるとはいえず、同じ意図の下創作された「寄茶歌」、「太行吟」に比べてより悲劇的色彩が強く、また英雄主義、楽観主義、敵の軽視といった当時の同志たちの過ちをかなり踏み込んで詳細に指摘するなど、この時期の高の作品の中でも異彩を放っている。

また、狂飜社以来の盟友である岡夫や、山西省出身の作家集団である“山葉蛋派”の同時代の作品と比較してみた場合も、この時期の高沐鴻の詩作には、注目すべき点が幾つか存在している；50年代中葉までの彼らの作品は、基本的に題材を同時代の現実に存在する課題から取っており、そうした課題の解決を示して社会主義建設の明るい前途を示す【問題⇒解決】構造を持つものが多くを占める⁶⁴。しかし、本節で取り上げた高沐鴻のこの時期の作品は、過去の抗日戦争期を題材とし、【問題⇒解決】構造を必ずしも有するものではない。とりわけ「十二月之歌」は“12月事変”を題材として嘗ての同志の過ちを指摘する内容となっており、当時の山西文壇においても異質さが目に付くものとなっている。では何故、高はこうした作品を創作したのだろうか？

1956年10月に創刊された山西文聯の総合雑誌『火花』に高沐鴻は「前言」及び「黄河一澄清」を寄稿している。この「前言」にその手がかりを求めてみよう；

“百花斉放”“百家争鳴”の政策は『火花』に創作を促進する力を齎した。(中略)我らは固より数多くの金科玉条に束縛され、思想において苦痛を強いられてきた；だが我らの芸術における必死の奮闘は十分だったろうか？あまりにも不十分だ！⁶⁵

このように、当時の“百花斉放”政策の推進を背景とする創作活動の活発化と、“百家争鳴”によって後押しされた文芸の自由への希求といった主張を見出すことができ、これが「太行吟」、「十二月之歌」といった大作の創作と、また共産党内部にも厳しい眼差しを向けることに繋がったと考えられる。

しかし、この後事態は反右派闘争へと急転換し、高沐鴻の立場を大きく変えることとなる、『火花』誌上の議論の流れを簡潔に追いかけてみよう⁶⁶；

まず1957年6月発行の『火花』第9号の段階では、社論「堅決貫徹“百花

齊放・百家争鳴」において“百花齊放・百家争鳴”の推進が強力に呼びかけられており、高沐鴻も「幾個問題的我見」という評論を発表して同様の立場を取っている。しかし 57 年 8 月発行の 11 号から、突然野心家が共産党にとって代わりとうし始めた（「界限」中流）、と反右派闘争の開始が宣言され、続く第 12 号において高沐鴻は「右派不是殺人犯？」という詩を発表し、「右派は殺人犯ではないが、彼らは造反しようと考えた：この人民の天下を覆すことは、何万人殺すことになると思う？」⁶⁷と右派批判を展開する。

しかし 1958 年 1 月発行の第 16 号から高沐鴻が批判の標的となり（「高沐鴻向何処去？」李東為・西戎・馬烽）、以後 1958 年 3 月発行の 18 号まで激しい批判が続く。だが 4 月発行の第 19 号からは大躍進が中心テーマとなり、反右派闘争、そして高沐鴻の話題は誌面から完全に姿を消す。

高を批判する評論⁶⁸においては、「一切為了提高一步」（1956 年 8 月省第二回文代会での発言）、「從魯迅先生想到」（1956 年 10 月未発表）、「追恨」（1956 年 11 月『出版通訊』）、「幾個問題的我見」（1957 年 6 月『火花』）といった彼の発言や散文が槍玉にあげられ、高の“金科玉条”を嫌い文芸の自由を求める主張が反教条主義を盾に党を攻撃した、と批判を浴び、さらに彼の地主階級という出身も批判の根拠とされてしまう。

こうして右派に認定された高は山西省図書館副館長・山西省人民委員会視察員に降格となり、省図書館において古籍と向き合う日々を送ることになる。

7. 文革前後から晩年へ

7.1 文革前後

1959 年、高沐鴻は山西で初めて“右派”の称号を外される。1962 年 8 月 7 日、『山西日報』に定型詩「迎澤公園賞花即興」を掲載し、続いて自身の苦難の歴史を題材とした長編小説『福福伝』の第 1 章「福福的動植園」を『火花』1959 年 第 8 号に発表するなど、旺盛な創作活動を再開させるかに見えたが、身体の不調を訴えて執筆を中断する。検査の結果早期の胃癌であると診断され、北京協和医院で切除手術を受け、ほどなく退院する。

文化大革命中の 1970 年、妻李水花と共に下放して武郷に戻るが、翌 71 年病のため妻を亡くす。この時期に書かれたと考えられる「東行露宿有感」には当時の高の厭世的な気分がよく反映されている：

蓬瀛万里自古传，
岂为长生觅金丹？
人间无我蜗居住，
直欲乘槎上青天！

蓬萊は万里のかなた古より伝わる、
どうして長生のため金丹を求めよう？
世間に私が住める陋屋とて無く、
ただ小舟に乗って青天に上らんことを欲す！⁶⁹

このように老境に入って長寿を求めようと思わず、また現世に居場所のないやるせなさが強く伝わってくる。

続いて文革後期の1973年に創作された組詩「傷逝残句」を見てみると；

浮草のような漂泊の日々を思うに、／まこと百年も一瞬のごとし。／悠久の歴史の断片を拾い上げてみると、／棘が心に刺さるのを禁じがたい。／紅顔のいまだ衰えを見せないときに、／私は四方に奔走した。／遠く四方に出て帰らず、／疲れ粗末な門を開けて待ち望む。（「一」）⁷⁰

長年の借りを未だ返さざるに、／再生を願うも叶い難し。／まこと逝く者追うべし、／倍にして返すも惜しくはない。／我が生涯初めての“孤独”を哀れみ、／忽ち恍惚として老いに向かう。／大志はまさに形なきものに消えんとするを嘆き、／ひとりこの悲しみを集める。（「二」）⁷¹

冒頭の第一節において若き頃の漂泊の日々を想い、また続く第二節においては今は亡き人を悼んで自らの孤独を憐み、また老いの到来を悲しんでもいる。しかし第三節では；

虽经百折而不回兮，
虽遭百辱而不替。
红炉煅我丹心兮，
赤焰长我壮志。
盖平生无一念之可愧兮，
故无朝夕之憾悔与嗟吁。
虽过失之颇为交错兮，
乃精神之永日而灿烂。

百の挫折を経験するも戻らず、
百の辱めを受けるも替わらず。
燃え盛る紅炉は我が赤心を鍛え、
赤い炎は我が大志を育てる。
蓋し生涯一念とて愧じることなく、
故に朝晩後悔することも嘆くことも無し。
過ちが頗る入り混じるとはいえ、
精神は永遠にして燦然と輝く。⁷²

挫折も屈辱も味わい尽くしたが、「紅炉」が鍛えた「赤心」と「赤焰」が育てた「壮志」を持つ私は自ら一点も愧じることはない、と胸を張り、さらに第四節において肉体は老いても精神はまだまだ青春の域にあると嘯く。そして末尾第五節において；

哀れむ、我が生の有限にして、／万物の有限なるに等しきを。／願わくは、
元氣と精神を振るいて、／永遠に大志と赤心を保持せんことを。（「五」）⁷³
生命の有限を哀しみながらも、精神の無限を願って作品を締めくくっている。

このように、本作においては老いの孤独や悲しみを歌いつつも、自身の「赤心」を誇り精神の不朽を願うなど、詩人の氣力の回復が見いだせる。また「兮」を句末に多用して『楚辞』の形式を模倣しており、嘗て自身の不遇を天に訴えた屈原の境遇に自らをなぞらえたものと考えられる。

7.2 文革後

文化大革命終結後の1978年10月、高沐鴻はついに名誉回復を果たし、湧き上がる感慨に任せて三部構成の長編叙事詩「故郷三部曲」を創作した。

本作は高の故郷である武郷の70年にわたる変遷の歴史を主題としており、第一部「小小的王朝」が抗日戦争以前、第二部「抗日烽火」が抗日戦争中、そして第三部「斬新天地」が解放後の武郷の姿をそれぞれ歌っている：

●第一部「小小的王朝」

まず第一部の冒頭では、詩人の俯瞰的視点から故郷である武郷の姿が描かれる：

もしあなたが奥深い西山の峠を出れば、／きっと黄河が緩やかに東に流れるのを目にするだろう；／もしあなたがうねる東山の山腹に登れば、／きっと多くの“炭鉱夫”の悲しい泣き声に出くわすだろう：／もしあなたが南北を一走りすれば、／きっと北嶺の東西の峰と、／南嶺の上司下司二つの村が対照をなすのを望み見るだろう。／これぞ東西相隔たること秦越のごとく、／南北近き事咫尺の間の長蛇の形をした故郷、七十年前の小さな小さな封建王朝だ。⁷⁴

封建王朝の主たる県知事の治世では、貧しい小作農や炭鉱夫は虐げられ、それを不当としてなげなしの金をはたいて県城に訴訟に出ても敗訴してしまう。城内にはそうした人々を食い物にする文人、商人、訴訟ゴロたちが、同情するふりをして彼らの姿を酒の肴にする；

実際のところ奴らは得意満面にこの活劇を鑑賞し、／同時に自分の悠々たる日々がいかにか心に適うか味わう。／こうした人々はみな庶民の手足を切り落として薪にし、／さらには庶民の血肉を煮て、焼いて、炒めて、揚げる。／これを以て奴らの酒の肴とし、／一人酒と洒落こんで、風流自慢。⁷⁵

こうした「食人」行為が常態化した県城の地獄絵図が描かれた後、今度は農村の主である地主や土豪の悪辣ぶりが紹介される。小作農や炭鋤夫から搾取するのは当たり前、さらに城内の役人や高利貸し、商人たちと結託して一つの権力システムを構築する；

両者は 政治、経済、婚姻 の三つの網を作り、／一つの同盟と反社組織を結成した。／街と村の大小官吏は彼らに抛らずしてだれが安心していられよう？／街と村の銭荘・質屋は彼らに抛らずしてどこが開業できよう？／この同盟は意気投合し、／三つの網は縦横に張り巡らされる。⁷⁶

このシステムの下、虐げられてきた農民・炭鋤夫たちは「ひたすら霹靂が青天から響き渡り、この一帯茫洋たる大地に狼煙が上がることを待っている。・・・」⁷⁷と世界が変わる合図を待ち望む。

●第二部「抗日烽火」

日本との戦争が始まると、蒋介石・閻錫山は抵抗することなく逃げ出す。そこへ毛沢東が現れ、共産党と八路軍を指揮して日本軍と戦い、太行山には抗日解放区が形成される；

東方が赤く染まり、太陽が昇る、／中国に毛沢東が現れた。／彼は共産党を指導し、八路軍を統率し、／中国人を指導して日本を撃った—彼こそわれらの救世主！／八路軍は太行山に上り、／高らかに抗日民主の司令旗を掲げる。／彼は侵略者たちの“三月滅華”の甘い夢を蔑視し、／漢奸たちの“抗戦必亡”という妄言を唾棄した。⁷⁸

解放区では人民が地主や土豪に代わって主人公の地位に就き、減租減息を実行し、民兵を組織して八路軍と共に日本軍と戦う。日本軍、国民党軍、閻錫山軍・傀儡軍に三方を囲まれ、多くの犠牲を出しながらも人々は抵抗を止めない；

敵味方の間に陣地が入り組むのみならず、／蒋介石、閻錫山、日本、傀儡各軍の初歩的な合流がすでに形成されているとは？／弾丸のような土地に、南に国民党中央軍、／西に閻錫山軍、北に傀儡軍および日本軍が存在する。／奴らは押し合いへし合い、腕が絡まり頭はぶつかり、／くしゃみ唾痰すべてはっきり聞こえるほど。⁷⁹

困難も真の英雄を押しつぶせず、／八路軍の辞書の中に“困難”という言葉は存在しない。／彼らは粟と小銃のお粗末な装備から、／機銃と重砲を擁する数十万の大軍にまで発展した。⁸⁰

次第に戦局は優勢となり、ヨーロッパ戦線の勝報も入ってきたころ、ついに日

本が降伏したという喜ばしいニュースが届く；

“八月八日 日本の鬼が投降した！／勝利の軍を組織し、／失われた土地を取り戻すため、／皆手を動かしちゃんとやろう！”⁸¹

●第三部「斬新天地」

日本の降伏後、蒋介石軍は我が物顔で解放区に攻め込む。しかし人民は立ち上がって国民党軍を追い払い、自身が主宰する新国家を立ち上げるが、太行山の人民もその一翼を担って活躍する；

太行山の人民は喜びに満ち溢れ、／日本の鬼を追い払い、蒋介石に打ち勝った。／自分が主人となり、全身に力が満ちる。／権力を掌握し、／一方面を指揮する。／彼らは国家統一の足取りを踏み、／故郷の建設を日の出の勢いで進める。⁸²

嘗て役人や高利貸し、地主に土豪たちによって支配され、一時は日本軍や傀儡軍に蹂躪されていた武郷は、新中国の20年余りの年月を経て面目を一新する；

馬家店では山沿いに林を作り、／麓で砂を除いて土を盛り、作物を試験的に植えた。／数年のうちにこの山は孫悟空の故郷花果山のようになり、／この浅瀬は穀倉地帯となった。⁸³

東山の麓には豊かな鉄鉱山があり、／鋼鉄を製錬するための石炭層もさらに豊富にある。／柳溝の旧坑道の近くに新たな坑道を開き、／設備の機械化は“炭鉱夫”を白面の貴公子に変えた。⁸⁴

こうした郷里の変化を前に詩人は喜びを隠しきれず、未熟、疎漏な部分はあるものの、それは後に続く詩人たちが訂正し、補い、より高みを目指してくれるだろうと予言して筆を擱いている；

奇聞に偉大な事績は書ききれず、歌い終わらず。／私はただ幸福の中に身を置き、／うっとり酔い、酔ってうっとりする。／未熟でお粗末、手ばかりを免れることができようか？／筆をおいて恐縮し—だが平然とする：／韓山は高くそびえ、漳河の流れは途切れず、／後に続く人々幾千幾万、筆幾千幾万、修正し、また補い、／思うがまま筆を尽くす、／七色の虹が天に燦爛と輝くように。⁸⁵

このように、高沐鴻の故郷である武郷の解放と発展という70年にわたるストーリーを歌う一大叙事詩であり、基本叙事的であるがまた豊かな叙情性も併せ持っている。詩句は再び長くなるが、平易な語彙が用いられており、前章で言及した50年代中葉の作品や、文革前後の作品の古語を交えた難解さは姿を消

している。

文革後、高は上記「故郷三部作」を皮切りに再び旺盛な創作意欲を見せ、数多くの詩作を発表する。その成果はのちに最後の詩集『回春堂詩鈔』の形にまとめられ、1980年7月、彼の死の直前に山西人民出版社から発行された。

この時期の詩作の傾向としては：「開国三十周年題句」（1979年9月）、「渴望与殷切的囑託」（1980年2月）、「我祈祷一場春雨霖霖」（1980年3月）、「春雪」（1980年3月）のような時事に言及したり即興で作られたもの、「悼念大師郭老」（1978年6月）、「詩歌儼如夜号－悼念詩人孫大悲」（1980年8月）のような死者を悼むもの、「最後の歌声」（1978年10月）、「有一個閘門我再不打開」（1979年4月）、「冬眠」（1980年1月）、「我要高唱贊美詩」（1980年5月）、「未完成的自伝」（未詳）、「自悼」（1980年7月）のような自身の内面や体調、来歴に眼差しを向けたもの、といったように分類することができる。

本稿を締めくくるにあたり、最後に「有一個閘門我再不打開」、「未完成的自伝」、「自悼」の三篇に注目してみよう。

●「有一個閘門我再不打開」

本作の冒頭は次のように始まる：

ある水門を私はまだ開けていない；／我が心は大きなダム—洋々たる内海だ。／そこには我が無限の—辛酸の涙、悲憤梗概の心情、／失われた青春、中断された歓喜が隠されている；／さらに無数の戦友たちが流した血の跡と、／孤独な魂の寂寞にして永遠の愛とがある—／それは何と黄金の光を放つ宝の簪であることか！⁸⁶

自身の心の水門の奥にあるもの、それは狂飆社時代、そして抗日戦争期に高沐鴻が詩の題材としたテーマたちであり、彼はそれを「黄金の光を放つ宝の簪」に喩えている。しかし詩人は二度とその水門を開けるつもりはなく；

果樹園一杯に果樹を植え、／山の松柏を伐採し、／浅瀬に草を撒き、／幾畝もの花々を育て、／それらが花開き実を結び、青々と茂り、／社会主義に彩りを添えるように？／この草木が茂り、花々が美を競う光景は、／あの黄金の光を放つ宝の簪にも勝るのではないか？⁸⁷

労働を通じた社会主義建設を描くことこそ心の中の「光を放つ宝の簪」にも勝ると歌う。このように高自身の詩作の経歴を凝縮したかのような作品となっており、若き日の作品を封印すると宣言しながら、本作自体は非常に抒情的であることが興味深い。

●「未完成的自伝」

本作は標題通り自伝的な作品であり、高沐鴻自身の思想的遍歴を歌ったものとなっている。冒頭では理想に燃える若き詩人が、自身と世界を救う方策を探し求めて苦しむ姿が描かれる：

自らを救うを求めるも叶わず、／どうして世を救うなどと言えようか？／そも世を救う良き処方こそが、／自らを救う根源なのではないか？／空前の大願を胸に抱き、／世を救う良き処方を求める。／我あまねく内外の手立てを 経めぐるも、／有史以来の茫洋に苦しむ。⁸⁸

そして仏陀・孔子・イエスといった内外の聖人たちの思想を検討してみるが、仏陀のように現生の苦しみを超越することはできず、孔子の教えは「民を教え諭して奴隷とする」⁸⁹ ものに過ぎず、イエスのように右頬を差し出すこともできない、と考へ、「我終始道に奔走し、／なんと一枝の住むところもなし。」⁹⁰ と思ひ悩む。そして長い漂泊の末、ついにマルクス・レーニン主義という真理に出会い：

この学説のために身を捧げ、／まさに心安らか憾みなし。／大衆こそ大聖人にして大賢人、／“自ら解放を求める” 関所を越えんと願うか？⁹¹

と自身の思想的遍歴の終着点を歌って作品を終えている。

●「自悼」

高沐鴻の最後の詩となる本作は、これも標題通り自身へ手向けた挽歌であり、八月中旬、病床から盟友鄭篤に送られ、のち『汾水』の1980年第10期に発表されている：

私は烽火を上げ戦う詩篇より生まれ、／私は現代建設の詩篇に死す。／生死に隔たりなど無く、／歌声は永久に絶えない。／私が死んだ後 我が歌声は、／風と雨、流水と大気、／虫の声と鳥の鳴き声、白雲と彩雲と化し、／無限の天地の一部となる。⁹²

冒頭において革命序盤から“四つの現代化”に至るまで戦い歌い続けた自身と自身の詩作を振り返り、死後も我が歌声は天地と融合して永遠に生き続ける、と歌う。そして人生八十年、唯一の心残りは“四つの現代化”のために詩作を以て貢献できなかったことだ、と嘆き、後進の詩人たちに「生死を問わず、災禍を恐れず、／永遠に彼らの偉大な事業と生死を共にし、しっかり結びつけ！」⁹³ と呼びかけ、後事を託して作品を結んでいる。

このように、これら最晩年の作品において、詩人の眼差しは自身の詩作と思

想に向けられており、80年にわたる自身の詩的、思想的遍歴を抒情性豊かに歌い上げている。最初の詩集である『新詩集』（1921）において発見された自我は、60年の遍歴を経て再び詩作の主題として見出されたのであった。

1980年8月25日8時20分、治療の甲斐なく山医一院でこの世を去る、享年80歳。死後間もなく9月1日には“高沐鴻同志追悼会”が開催され、省の各部、民主党派、各人民団体代表、生前の友人や親族など、400人が追悼会に参加した。

おわりに

以上、高沐鴻の1930年代から80年代に至るまでの生涯と詩作を年代順に紹介してきた、ここで改めて1920年から80年に至る60年間の彼の詩作の変遷の軌跡をまとめてみたい；

初期の習作をまとめた『新詩集』（1921）においては、目覚めた自我とその眼差しを通じて見出した自然の美と神秘、そして社会の矛盾が主題となっている。続く20年代半ばの狂飆運動期においては；第一詩集『天河』（1927）の恋愛至上主義から第二詩集『夜風』（1928）の「自我」・「恋愛と闘争」・「反封建・思想革命」へとより戦闘的な主題へ変化していき、そして第三詩集『湖上曲』（1929）において急激な左傾化及び叙事性と物語性の獲得といった大きな作風の変化が現れる。

狂飆運動が終わりを告げた後の1930年代、高沐鴻の作品には20年代から引き継ぐ幻想性と叙情に【旧社会の破壊からマルクス主義による新世界の建設】という新たな目標点加わる。30年代後半から40年代初頭にかけて革命運動に専念した後、1943年に発表された「高貴堂」においては、徹底的に叙情を排した物語性と、平易な用語とリズムカルな詩句といった大きな作風の変化が見出され、この傾向は建国後、50年代初めまで続くことになる。

1950年代中葉において、高沐鴻は「寄茶歌」（1954）、「太行吟」（1956）、「十二月之歌」（1956年）といった抗日戦争を主題とする長編叙事詩を続けて発表する。社会主義建設の成功を高らかに歌う作品が多くを占める当時に在って、難解な文言を多用し、題材を過去に求め、また往時の同志の過ちを指摘するこの三作は些か異彩を放つものであったと言える。

右派に認定され、沈黙を強いられた文革中、高は古詩の形式を借りて自身の赤心を訴える。文革が終わり、名誉回復を果たした後、彼は「故郷三部曲」を

皮切りに旺盛な創作活動を再開させる。とりわけ「故郷三部曲」は狂飆社時代から高が得意とした長編叙事詩であり、叙事を基本としながら豊かな叙情性も併せ持ち、詩句は長くも平易といった、彼の詩風の集大成といった趣を持つ。

晩年に至り、彼の眼差しは再び「我」自身に向けられ、出発点である『新詩集』で見出した主題を再び問い直すこととなる。

こうした五四運動の影響から出発した叙情的なスタイルから叙事優先の作風を獲得し、さらに 50 年代半ばに転換点を迎える、という変遷の軌跡は、狂飆社時代からの盟友岡夫や、また高沐鴻がその登場を促した「山葉蛋派」の作家群の作品が辿った変遷の跡と相似形を描いている。但しその変化のタイミングは高沐鴻にあってはやや早く訪れており、この変化の軌跡の相似とタイミングのズレがどこから来たものなのか、この問題については今後高長虹をはじめとする狂飆社の同人たちの作品の分析を進めたうえで解を求めて行きたい。

¹ 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いてできる限り日本語の新字体で表記することとする。

² 『島大言語文化』第 49 号 2020 年 10 月

³ 以下本稿において、高沐鴻の経歴について触れた部分は「高沐鴻生平及創作年譜」李東光（『高沐鴻詩文集』所収）を主に参照している。

⁴ 本稿においては『高沐鴻詩文集』（1991 年 北岳文芸出版社、以下『詩文集』）所収のものを参照した。

⁵ 『詩文集』p698 原文は「被一切流派的势力，敌对的势力包围之狂飆运动，又以羈于金钱的凶残铁范下，不能转动、生长、圆满、成就。」

⁶ 『詩文集』p698 原文は「然而狂飆主张行动艺术、大爱艺术。在我们亲身参加劳（动）和劳动运动之后，我们将主张劳动艺术。无产阶级艺术。而同时并创作它们。」

⁷ 『詩文集』p355

⁸ 1928 年創刊、一度停刊して 1931 年 4 月 20 日に復活、綏遠民国日報社發行。高沐鴻の文章が掲載され始めたのは 1931 年 11 月 20 日 106 期「前途」からであると推測される。

⁹ 同上 p359

¹⁰ 青春月刊社主編、南京拔提書店發行。誌上の広告によると高長虹の『毎日評論』が拔提書店から出版されており、狂飆社メンバーと近い関係にあったことがうかがえる。1 卷 3 期裏表紙の「本刊第二期目録」に高沐鴻の詩「推開頹廢的酒杯」が掲載されているが、現物の確認はできていない。

¹¹ 『詩文集』 p360

¹² 同上 p360

¹³ 同上 p364

¹⁴ 同上 p365

¹⁵ 同上 p368

¹⁶ 「走上了夢幻的途程」の「我只惭愧我一身还未深入劳动者群！（私はまだ労働者の群れに深く入り込めないことを恥じる！『詩文集』 p368）」といったフレーズにその一端を垣間見ることができる。

¹⁷ 高沐鴻の狂飆社時代の詩風の変遷については拙稿「高沐鴻の詩作について—狂飆運動期の作品を中心に—」（『島大言語文化』 49号 2020年10月）を参照されたい。

¹⁸ 『詩文集』 p379

¹⁹ 本稿においては『詩文集』所収のものを参照した。

²⁰ 『詩文集』 p381

²¹ 同上 p383

²² 同上 p387

²³ 1950年10月15日発行、中国国家図書館所蔵のものを閲覧させて頂いた、ここに厚く御礼申し上げる。

²⁴ 原文は「「我的眼睛发呆，疑心那是一片大草原，如此丰盛勃茂！」> 你的眼睛明明看得清楚，这是土地还家后农民的成果，怎样能「发呆」呢！你怎能「疑心」不是「麦子长得一人高」而是「一片大草原」呢？翻身农民说，「毛主席领导咱们翻了身！咱们生产发家富国家！」所以很明显的：「我的眼睛发呆」「疑心…」是个人感情流露，不是站在劳动人民中的歌颂。它没有表达出翻身农民对土地，庄稼的爱。」

²⁵ 原文は「最后需说明的是，「农村所见」虽有以上缺点，但总的看来，应该是一首比较好的诗。因为它是以新的感情，歌唱了新的时代，虽然免不了还有旧的「个人」感情发泄，还有非群众的语言夹杂在里面，但它已是穿着「延安服」在为人民服务的大道上走，而不是戴着桂冠去给「皇帝」品味。」

²⁶ 『文化大革命への道』（丸山昇 2001年 岩波書店）

²⁷ 『回春堂詩鈔』「自序」山西人民出版社 1980年

²⁸ 『詩文集』 p392

²⁹ 『詩文集』 p412

³⁰ 同上 p413

³¹ 同上 p414

³² 同上 p434 原文は「抗日的片片断断，／都还发着火焰；／有几句散佚的诗歌，／让我来朗诵一遍．／章节早已打乱，／字句也很不全；／对于伟大的史迹，／只好象管中窥天！」

³³ 同上 p434 原文は「看看鬼子进了娘子关，／黄尘高飞直冲天！／蒋军阎吏夹着尾巴逃，

／撒下了表里好河山！]

³⁴ 同上 p447 原文は「漳河结了三尺冰，／黄土大道冻如砧。／远听嚎嚎近囊囊，／来了鬼子九路兵！]

³⁵ 同上 p451 原文は「好笑鬼子发了痴，／远攻地山来找死。／该不知；我们明眼儿走来还不辨路，／你瞎眼撞来是碰死壁？]

³⁶ 同上 p456 原文は「我军接着遍山来，／天降神旅早安排；／伏地草莽抬了头，／呼呼漫成一片海！／一片人海从天降，／草莽本是刀和枪！／石头缝里长出手！／环山下布下铁罗网！／我军接着下山腰，／近处打枪好把准瞄。／扑下山腰白刃交，／看你鬼子哪里逃！」

³⁷ 同上 p463 原文は「这场大战打了半日，／杀死鬼子几千？／有个数目字咱不提，／留给鬼子自己算去。]

³⁸ 同上 p465 原文は「战役罢休我回师，／堂堂大道上满载笑语。／这里国土复了原貌，／自由，干净而又宁谧。]

³⁹ 同上 p467 原文は「这就叫抗日战争第一关，／顽军跟我们打的麻烦：／我同鬼子缠线蛋，／一里一外磨儿玩，／蒋军却站在一旁看！]

⁴⁰ 同上 p475 原文は「持久战打到一盆火，／敌我形势“犬牙相错”。／我军乘虚攻弱大出击，／鬼子损兵折将唤奈何。]

⁴¹ 同上 p482 原文は「南去战场好开辟，／一往长驱几千里；／一戳一个大窟窿，／蒋介石送出见面礼！]

⁴² 同上 p496 原文は「敌伪合了流，／黄水漫下游。／缙绅先生弹冠笑：／“可算熬到了这日头！”]

⁴³ 同上 p502 原文は「有名叫做“组织起来顶机器用”，／互助组、变工队满天星。／自古只有各人自扫门前雪，／那见张三李四变做一家人？]

⁴⁴ 同上 p504 原文は「为了跟人民更靠紧，／党中央发动整顿三风。／大家都脱胎换骨问自己：／“是否愿全心全意为人民？”／在人民面前大家都猛醒：／原来人民是个君，自己是个臣；／人民是父母，自己是儿女身 - ／忠孝二字在这里才贯通！]

⁴⁵ 同上 p508 原文は「日本鬼子投了降，／三分天下一分收了场。／三支箭头重打转，／三支势力在消光。]

⁴⁶ 同上 p512 原文は「黄河水涨河堤倾，／美记飞机转天空。／蒋美张口来吞解放区，／那料伸进猪鼻子着了疼！]

⁴⁷ 1939年12月、抗日戦争期に、閩錫山軍が八路軍に対して行った反共事変。

⁴⁸ 『詩文集』 p514 原文は「鬼子铁蹄欢，／踏遍太谷川。／凤凰山前歇歇脚，／摇头摆尾入东南。／打开子洪口，／吓走“一六九”。／大腹将军号“长败”，／拉来的伙子回头溜！]

⁴⁹ 同上 p527 原文は「一堂课罢心窍开，／新军战士知由来。／抗日舞台上人纷纷，／唯有人民是正派！]

⁵⁰ 同上 p529 原文は「蒋军去日远，／鬼子来日近。／晋东南千里一片土，／旦夕气象

焕然新。／自从人心打回转，／谁还再记往日天！／慢说蒋阎吓不住，／鬼子亲来也敢会会面！」

⁵¹ 同上 p542 原文は「又道：“远望太行山，／赤都赛赣南：／共产又公妻，／杀人当戏玩。”／不怕你谣言造得凶，／眼巴巴无法渡河东！／人民自在天堂上，／你乱嚼舌头白用心！」

⁵² 同上 p547 原文は「你要独当一面也能行，／自然要把任务来保证：／不能说，你喜欢的是：自由而愉快，／忘掉的是：一付大担子掬在身！／同志呀！我们应该来自问：／比之人民，自己算个甚！／何可自赞不绝口！／何可自做得头发昏！」

⁵³ 同上 p549 原文は「前方有人来急电，／他向我们进忠言：／“太北遍地点了火，／何以岳南无缕烟？／新军里搅进旧军官，／说是新旧大联欢！？／不管联欢不联欢，／须防背后有暗算！”／暗算不暗算，／同志们笑憨憨。／自思：“谁敢把虎须捋，／谅扁他几个区区旧军官！”」

⁵⁴ 同上 p553 原文は「鬼顽布成网，／我军网内藏。／有的同志眼不见，／犹自酣睡乐徜徉。」

⁵⁵ 同上 p557 原文は「十二月，月光冷灿灿！／山头望月咫尺间。／冷月圆又圆，冷月转西天。／鬼顽军重重包了我一个圈！」

⁵⁶ 同上 p557 原文は「山头抗日也咽苦，／草根树皮来共汝。／看他山下多醉饱，／吃罢猪羊吃人肉！」

⁵⁷ 同上 p560 原文は「夜来未闻风雨声，／暮吐朝雾如白云。／不见雾散红日出，／只闻雾里叫声腾。／远听驹响近隆隆，／好似早操来练兵。／霎眼雾散山头现，／密密枪刀锁大门！」

⁵⁸ 同上 p562 原文は「刺刀主儿麻子脸 - ／原来是咱昨夜好亲眷！／昨夜杀猪宰羊慰劳他，／今朝怎便翻狗脸？」

⁵⁹ 同上 p563 原文は「哈哈，原来果如此，／野狼披上家犬衣！／守藏自盗古有人，／警卫连队今叛逆！」

⁶⁰ 同上 p566 原文は「走马急飞北上路，／路上消息血糊涂：／说道男女都被杀，／不杀的也终身作俘囚」

⁶¹ 同上 p566 原文は「有人还把噩耗传，／方某背叛作了官！／洛阳伪署做秘书，／到手的杜小娜成伙伴。」

⁶² 同上 p567 原文は「想想事变头，／想想事变尾：／攻破堡垒从何起？／倒戈战场又是谁？／山北警电日夜来，／山南同志不知开；／开读亦如茫无字，／摇头仍道：“赶得来！”」

⁶³ 同上 p568 原文は「大脚守住太行山，／长矛逼退鬼和顽。／抗日不绝几如缕，／山左山右西风寒！」

⁶⁴ 拙稿「趙樹理文学の変容」（『鳥大言語文化』15号2003年8月），「馬烽文学における語り」（『鳥大言語文化』20号2006年3月），「西戎文学における物語構造」（『鳥大言語文化』20号2006年3月）

文化』24号2008年3月)、「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号2009年3月)、「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30号2011年3月)、「東為文学における物語性」(『島大言語文化』31号2011年10月)、「岡夫詩における叙事性(下)」(『島大言語文化』36号2014年3月)、を参照頂きたい。

⁶⁵ 『火花』創刊号1956年10月 原文は「“百花齐放”“百家争鸣”的政策,给“火花”带来了一股催生力量。(中略)我们固然被许多清规戒律束缚过了,以至思想上收到了折磨;然而我们在艺术上坚苦卓绝的自我奋斗,是不是够了呢?不够的很!」

⁶⁶ ここで言及している雑誌『火花』はすべて北京国家図書館所蔵のものを閲覧させていただいた、ここに厚く御礼申し上げる。

⁶⁷ 原文は「右派不是杀人犯,他们却想来造反:翻了个人民的天,你看杀人有几万?」

⁶⁸ 「揭露高沐鴻,批判高沐鴻!」(鄭篤『火花』17号1958年2月)、「对高沐鴻反党、反馬列主義思想的批判」(李慰『火花』18号1958年3月)、「斥高沐鴻的謬論」(劉江『火花』18号1958年3月)など

⁶⁹ 『詩文集』p571

⁷⁰ 同上 p573 原文は「忆飘萍之日月兮, / 诚百年有如一瞬。 / 拾长河之鳞爪装兮, / 难禁芒刺之穿心。 / 当红颜之未衰兮, / 我奔走于四方。 / 远游四方而不归兮, / 劳开柴门以伫望。」

⁷¹ 同上 p574 原文は「恍宿债之未偿兮, / 愿再生而难能。 / 诚逝者之可追兮, / 虽倍偿而不吝。 / 哀吾生之初“独”兮, / 忽恍然已趋衰老。 / 叹壮志将销于无形兮, / 念念独钟此悲悼。」

⁷² 同上 p574

⁷³ 同上 p575 原文は「哀吾生之有限兮, / 等万物之有穷。 / 愿振元气与元神兮, / 永葆壮志与丹心。」

⁷⁴ 同上 p577 原文は「假如你走出深深的西山山口, / 你便会看见一条黄水漫漫东流; / 假如你登上盘盘的东山山腰, / 你便会遇到不少“黑奴”哀哀叫号; / 假如你走南走北跑一遭, / 你便会望见北岭的东峰西峰, / 南岭的上司下司两两对照。 / 这便是东西相距远如秦越, / 而南北近在咫尺的长蛇形的故乡, / 一个七十年前的小小的封建王朝。」

⁷⁵ 同上 p580 原文は「实则他们是在志得意满地欣赏这出活剧, / 同时也在欣赏自己的悠闲日子过得多么称心。 / 这些人物都在刀劈着老百姓的四肢当柴烧, / 再把老百姓的血肉汤煮, 油煎, 炒炒, 爆爆。 / 以此作为他们下酒的肴菜啊, / 实行着自斟自酌, 风流自豪。」

⁷⁶ 同上 p587 原文は「二者结成了三面网: 政治网、经济网、婚姻网, / 组成了一个联盟和死党。 / 哪个个城乡的大小官儿不由他们来稳坐? / 哪个个城乡的钱庄当行不由他们来开张? / 这个联盟水乳交融, / 这三面网交错纵横。」

⁷⁷ 同上 p588 原文は「只等待一声霹雳从晴空响起, 这一带茫茫大地便会充满烽烟。」

78 同上 p589 原文は「东方红，太阳升，／中国出了个毛泽东。／他领导共产党，领导八路军，／领导中国人民打日本 - ／他是我们的救星！／八路军上了太行山，／高举抗日民主大纛一面。／他藐视侵略者“三月亡华”的好梦／也唾弃汉奸之流“抗战必亡”的妄谈。」

79 同上 p593 原文は「何止是敌我之间犬牙相错的阵型，／你可知蒋、阎、敌、伪初步合流已经形成？／一片弹丸地，南有中央军，／西有阎匪军，北有伪军和鬼子军。／他们拥拥挤挤，臂膀相参头相碰，／咳嗽唾痰都听得清。」

80 同上 p598 原文は「困难压倒不倒真正的英雄，／八路军的词汇里不见“困难”这字形。／他们从小米加步枪起，／发展到机枪重炮几十万大军。」

81 同上 p605 原文は「“八月八日鬼子投了降！／组织胜利军，／收复失地忙，／大家动手好好干一场！”」

82 同上 p607 原文は「太行山下人民喜洋洋，／打跑了鬼子，打赢了老蒋。／自己当了家，满身劲儿长。／掌握了大权，／指挥着一方。／他们踏着国家统一的步伐，／要把家乡建设的蒸蒸日上。」

83 同上 p610 原文は「马家店依山来造林，／山脚下驱沙垫土把庄稼试种。／几年间此山已成为花果山，／此滩已成为米粮囤。」

84 同上 p610 原文は「东山脚下有丰富的铁矿，／炼钢铁的煤线煤层更宽广。／柳沟的旧洞旁边开新井，／机械化把“黑奴”变成个白面郎。」

85 同上 p611 原文は「奇闻伟绩写不遍，唱不完。／我只觉得置身幸福中，／陶然醉，醉陶然。／荒疏，粗陋，挂一漏万岂能免？／停笔歉然 - 又坦然：／鞍山高耸漳河流不断，／自有后来人千万，笔万千，来增删，来补全，／淋漓挥洒，／七彩长虹灿烂天。」

86 同上 p616 原文は「有一个闸门我还未打开：／我心头是一座大水库 - 汪洋的内海。／它深藏着我的无限的 - ／辛酸的眼泪，慷慨的情怀，／失去的青春，中断的欢快；／更有那无数战侣流下的斑斑血迹，／与一个孤魂寂寞的永存的遗爱 - ／那是一枝何等金光闪闪的宝钗！」

87 同上 p616 原文は「种满园果树，／栽半山松柏，／撒一滩寸草，／培几畦花卉，／使它们开花结果，繁荣昌盛，郁郁葱葱，／为社会主义增添点光彩？／这一番草木葱茏、百花竞艳的光景呀，／可不胜似那一枝金光闪闪的宝钗？」

88 同上 p638 原文は「求自救之不得兮，／又何救世之可言？／抑救世之良方兮，／乃自救之根源？／抱旷世之宏愿兮，／求救世之良方。／我遍涉中外之途径兮，／穷迫有史之苍茫。」

89 同上 p642 原文は「教诲吾民作奴婢」

90 同上 p645 原文は「我终年奔波于道路兮，／乃无一枝之可栖。」

91 同上 p648 原文は「为此学说而献身兮，／将心安理得而无憾。／大众即大圣与大贤兮，／愿渡过“自求解放”之一关？」

- ⁹² 同上 p649 原文は「我生于烽火战斗的诗篇，／我死于现代建设的诗篇。／生死毫无间隔，／歌声永久不绝。／我死后我的歌声，／将化为风和雨，流水与大气，／虫声与鸟鸣，白云与彩霞，／作为无尽的天地的一枝一叶。」
- ⁹³ 同上 p650 原文は「不论生死，不畏浩劫，／永远与他们伟大事业同生同死紧紧结合！」

* 本稿は、令和元年度（2019年）科学研究費補助金（課題番号 19K00371）による研究成果の一部である。